

MONTHLY

世界の視点で情報を発信する総合誌

2015
6
JUNE

KORON

発行・株式会社財界通信社 平成27年6月1日発行 毎月1回1日発行 第48巻6号 昭和47年11月10日第三種郵便物認可

「ホンダジェット」が翔んだ 創業者の夢29年来の研究実る



月刊公論



長尾和宏
(ながお かずひろ)
医療法人社団裕和会理事長、
長尾クリニック院長

1984年 東京医科大学卒業、大阪大学
第二内科入局、医学博士(大阪大学)授与、
1991年 兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業、現在に至る
日本慢性期医療協会理事、日本ホスピス在宅ケア研究会理事、日本尊厳死協会副理事長、全国在宅療養支援診療所連絡会理事、関西国際大学客員教授、東京医科大学客員教授(高齢総合医学講座)

【医学博士】日本消化器病学会専門医、日本消化器内視鏡学会専門医、指導医、日本専門医、医学専門医、日本禁煙学会認定医、労働衛生コンサルタント【著書】『平穏死・10の条件』(ブックマン社)、『抗がん剤・10のやめど選択』(ブックマン社)、『胃ろうといふ選択』(ブックマン社)、『選道』(セブン&アイ出版)、『抗がん剤が効く大病院友』(主婦の友社)

【医学書】『第一回医療のすべて』(中山書店)、『第二回認知症医療』など多数。

がん検診受け放置して

には「放置療法」は理にかなつた考え方であり、極論本が売れようが売れまいが、放置することは昔も今も決して珍しいことではない。

受けた方がいいがん検診

がん検診を受けたほうがいいがんを独断と偏見で書いてみる。塩辛いものが好きな人は、できれば胃カメラでがん検診を受けてほしい。酒とタバコが好きな人なら、食道がんや咽頭がんもリスクが高いので胃カメラの先生に直接、カメラを飲む直前に「喉と食道もよく観てくださいね!」と言つたほうがいい。よほど目を凝らして見ないと、助かる範囲の食道がんは見つけにくいのだ。もし余裕があれば「ピロリーアンモニウム」を飲んで見たいと加えて欲しい。もし胃がんが無くて慢性胃炎があるなら

るべきか受けざるべきか もいのいがんもある

その理由はがん医療の現状に満足していないからであろう。心残りがあったからだろう。私たち医師はこうした国民の声にしつかり耳を傾けなければならぬ。

日本人の2人に1人ががんになる。3人に1人ががんでも亡くなっている。これは脅ではなく紛れもない現実だ。がんは数多ある病気の中でも最もありふれた病気である。なのに有名ながんになると騒ぎになる。有名ながん専門医が「自分ががん患者になつて初めて分かったこと」のような本を書いているように、がんという病を一人称で捉えることは意

うない人達が極論を離してていい。その理由はがん医療の現状に満足していないからである。心残りがあったからだろう。私たち医師はこうした国民の声にしつかり耳を傾けなければならぬ。

日本人の2人に1人ががんになる。3人に1人ががんでも亡くなっている。これは脅ではなく紛れもない現実だ。がんは数多ある病気の中でも最もありふれた病気である。なのに有名ながん専門医が「自分ががん患者になつて初めて分かったこと」のような本を書いているように、がんという病を一人称で捉えることは意

うない人達が極論を離してていい。その理由はがん医療の現状に満足していないからである。心残りがあったからだろう。私たち医師はこうした国民の声にしつかり耳を傾けなければならぬ。

日本人の2人に1人ががんになる。3人に1人ががんでも亡くなっている。これは脅ではなく紛れもない現実だ。がんは数多ある病気の中でも最もありふれた病気である。なのに有名ながん専門医が「自分ががん患者になつて初めて分かったこと」のような本を書いているように、がんという病を一人称で捉えることは意

うない人達が極論を離してていい。その理由はがん医療の現状に満足していないからである。心残りがあったからだろう。私たち医師はこうした国民の声にしつかり耳を傾けなければならぬ。

日本人の2人に1人ががんになる。3人に1人ががんでも亡くなっている。これは脅ではなく紛れもない現実だ。がんは数多ある病気の中でも最もありふれた病気である。なのに有名ながん専門医が「自分ががん患者になつて初めて分かったこと」のような本を書いているように、がんという病を一人称で捉えることは意

うない人達が極論を離してていい。その理由はがん医療の現状に満足していないからである。心残りがあったからだろう。私たち医師はこうした国民の声にしつかり耳を傾けなければならぬ。

口人に一人ががんになり、人が死ぬ

外に難しい。

がん検診の受診率が日本は先進国

のなかで低いことが問題視されてい

る。

国民皆保険制度があるから自覚

症状が出てからで充分だろう、と甘

えているのか。あるいは、がんにせ

よ死にせよ、「自分だけは例外」と

樂観的に考えているのか。あるいは、「もしがんが見つかたら怖い」という小心者が多いのかもしれない。

何を隠そう、私自身もう何年も検

診とやらを受けていないので偉そう

なことは言えない。

放置しても死ににくいがん

あるカルチャーレッスンから講演を依頼された。何を話してもいいというので「放置したほうがいいがん」治療したほうがいいがん」というタイトルを掲げたら担当者が飛んできた。「先生、ふざけないでください!」

当たり前のことをお伝えしようと思つただけながら、担当者の慌てぶりを見てこちらが驚いた。

がんの予後を表す「5年生存率」という指標がある。病気が判明していろんな治療を受けるにせよ、5年後に生存している確率である。2003年~2005年にがんと診断さ

ば、胃がん予防のためのピロリーアンモニウムを飲んで見たい。胃の対象者になるからだ。

お肉が好きな人には便潜血検査と腹部超音波検査をお勧めしたい。便潜血検査は、つまり腸のような棒を便に刺すだけで苦痛はゼロ。できれば2本を提出願いたい。増加する膵臓がんや胆のうがん、胆管がんは、黄疸や腹痛などの自覚症状が出た時には既に手遅れのことが多い。機会があれば腹部超音波検査を受けて頃便と胆管や胆管の拡張でがんを疑う。もし直径1~2cm程度で発見できれば命が助かる場合が多い。

肺がんの早期発見は意外に難しい。もう他臓器に転移があるステージIVの肺がんでも胸部単純レントゲンで見落とすことがある。特に喫煙者は毎年撮ると放射線被ばくが問題にな

う。

肺がんの早期発見は意外に難しい。

もう他臓器に転移があるステージIV

の肺がんでも胸部単純レントゲンで見落とすことがある。特に喫煙者は毎年撮ると放射線被ばくが問題にな

う。